

ふるさと(三)

加藤 策 二

(一) 西南の役余聞

濃霞山・城山・白坪山

過ぐる年の弥生、雛の祭りの宵、幼い頃共に学んだ学友の集いが五十年の月日を経て別府で催された。帰郷の時は常に用いる新幹線で京都へ、さらに彗星に乗り換え佐伯へ。当朝八時に着く。

数年前父母の五十回忌の法要を済ませた駅の裏手、平野の山にある先祖の墓地に、酒を供え線香を手向け、叔母一家や祖父の弟妹のお墓に詣でる。この地には祖父が先達となって切り開いた五、六百の墓地群がある。

前面に長島川を挟んで、元海軍航空隊、防備隊、軍需部跡を見下ろす。濃霞山、長島山の合間から見える海には子供達の頃、帆を上げどこに行くやら多くの帆船が見え隠れ

していた。たっぷり時間があるので濃霞山に登る。

濃霞山は軍の水源地になり綺麗に整備され、昭和十三年までは誰でも登れたが支那事変中に軍の機密保持が厳しくなり立入禁止になっていた。

私は平野地区の右手に続く城山に登った。

佐伯の人々は、国木田独歩が何度も登った標高百二メートルの城山を愛している。私はこの山が好きだ。

訪れる人影も無く静寂そのもの、南国といってもめずらしい八分咲きの山桜が迎えてくれた。

城山から見える町並みは狭い土地に肩を寄せ合って、かつての暴れ川、また白魚の取れる九州で二番目の清らかな水を湛えた番匠川のデルタ地帯。三キロメートル四方に人口五万三千人の大半が住み着き、なごやかに暮らしている。頭を南南西に向け、向かいに見える佐伯城址より手前に視線を下げると、新しく開発された墓地群がある。右に目を転じると、日豊本線を越え、こんもりとした林が目にとまる。岡の谷招魂所といひ明治十年の西南戦役にて戦死された官軍の将卒、警視羅卒の眠れる場所である。

序に二、三の地理を述べる。招魂所の右に見える小さな

森は天神さん。次に白坪部落。街の氏神様五所明神。二千数百年の銘木の地。次に故郷蟹田。駅裏の我が家の墓地のある平野と続く。後ろは標高二一メートルの白坪山が佐伯港を囲むように連なっている。白坪山を祖母達は「たかとおばね」と言っていた。

佐伯駅の東南、濃霞山（現野岡山）を下り、防衛庁に造ってもらった「野岡緑道」を通り蟹田を過ぎ、白坪の菖蒲の群生地を右に、幼き頃の学舎東尋常小学校を左に、旧藩時代に植えた櫨の道を通れば、今は桜並木の老木群となり梢は競い合つて絡み、花が芽吹き始めていた。細い道をすぎると右前方に臨濟宗の修行寺養賢寺が見える。その手前左側には中学校時代教練で鍛えられた佐伯中学（現佐伯鶴城高等学校）のグラウンドがある。右折し城山の緑に沿つて五、六百メートル行き、日豊本線を越えると岡の谷招魂所（陸軍墓地）が見える。

#### 岡の谷招魂所（陸軍墓地）

この岡の谷招魂所には、明治十年豊南の地に日向の地に西郷軍と戦い功名を馳せ殉じた政府軍将卒百三十四柱、警視庁羅卒十四柱が葬られている。一基毎に姓名、出

身県、戦死の地、階級が凝灰岩に刻まれた墓碑があった。今はその殆どが消え失せ判読にも事欠く。

中央には大きな自然石に「敵愾」と書かれた有栖川宮の筆になる記念碑が堂々とたてられている。碑文には旧日出藩士、後に東京高等師範学校長になる秋月新太郎氏の簡潔にして名文、将卒を称える顕彰の銘が刻まれている。人呼んで「招魂場」或いは「陸軍墓地」と名付けられている。北陸、関東、東北地方の兵士の墓が多い。

私たちは、小学校高学年の頃、年に数回周辺の清掃も兼ね学校よりやつてきて、その頃のお話を耳をそばだてて聞き入っていたものだった。

幼い頃一番恐ろしかったのは「西郷騒動と桜島の噴火であった」と祖父母、父母の言い伝えを聴いた思い出がある。桜島の噴火は、大正三年人家焼失二千二百六十余、軒、死傷者千七百人、火山灰が佐伯の地にも降り注ぎ鹿児島、宮崎は避難の人でごった返していたと言ふ。

昭和十八年九月十九日、二十日に降った雨は、八百九十二mmと、昭和二十年の枕崎台風を除けば最も大きい雨。風雨の危険に数年おきに晒されていた。

少しぐらいの台風には動じない故郷の人々も、何処か

ら飛んでくるかわからない艦砲射撃や噴火は、予告もなしにやってくるので特別に怖かったと思う。官軍の巡洋艦浅間から西郷軍に向け放った砲弾が、我が家の裏数メートルに降ってきた事もあった。

西郷軍、豊南の地で戦うー延岡・臼杵・佐伯

明治十年田原坂の戦いで敗れた西郷軍は、故郷薩摩に向かったが、人吉に上陸した官軍に退路を断たれ、海路上京し政府の反省を求めるよう進言した知将野村忍介は二千の兵を西郷より預かり、再起を図るため延岡を根拠地とし、大分から海路東上しようとして矛先を豊後の地に向けた。中津の増田宋太郎隊百四十名と共にまず竹田を攻略、竹田藩士六百名を指揮下に入れ報国隊と名付けた。その中の一個中隊をもって大分県庁を襲撃するも堅固な守備に阻まれ、鶴崎に方向を変え攻撃した。折悪しく東京より警視庁巡查隊数千名が上陸、一時は西郷軍の攻撃に数百名が死傷したが、西郷軍の寡兵を見抜いた警視庁隊に攻撃され離散した。臼杵では議論の末藩論を討薩に統一した旧臼杵藩士七百八十五名が襲撃してきた西郷軍を撃退、後官軍と共に戦う。

故郷佐伯では、数ヶ中隊の西郷軍が臼杵攻略に向かう前後に襲来、我が家の裏山にあった藩主の別荘跡「松館」に屯所を設けた。程なくして軍資金に困った西郷軍は、松本清張の処女作「西郷札」にも書かれているよう、日向の佐土原で軍票（西郷札）を作りばらまいたが、当時はまだ上京用の金子をある程度持っていたとみえ、地元より仕入れる野菜、鮮魚、米麦、調味料などの支払いは現金勘定であった。農漁村には大いに歓迎され、我が家の曾祖父の弟の一人は、西郷軍の買入れ役や雑用に参加していた。

旧佐伯藩士は御目見格以下を加え四百十余人（二万石の藩士としては同格の他藩より八十人以上多い。藩の蔵書八万冊ー佐伯文庫など佐伯は裕福であった、過年、萩の乱の長州藩士を匿った罪で気鋭の藩士を謹慎させる。又廃藩置県により藩の禄高が一割減石され藩士を削減し多くの藩士が路頭に迷う事となり、一部の藩士は一揆に走らんとして蟄居閉門や一年の禁獄の士が多くでた。それゆえ藩主や新政府に反感を抱く者も多く。討薩の藩論決せず、その中の血気にはやった四十名程の侍が西郷軍に加わり新奇隊と名付けた。他は日和見主義で官軍に加わったとの資料はない。西郷軍は十数日この地にいた。程

なくして沖合に官軍の巡洋艦浅間が入港、二十インチの砲口より艦砲射撃を始めた。弾丸は割と精度がよく屯所には被害は無かったが、付近百メートル以内の我が家の畑や山林は被害をうけた。この攻撃により驚いた西郷軍は日向路へと退却していった。前述の元佐伯藩士新奇隊長と共に我が家の一人もこれに従った。

戦闘は佐伯市黒沢、直川村陸地峠（かちち）、仁田原、重岡、日向三河内等で二ヶ月以上に渡り続いた。西郷軍は狭隘の地形をよく利用して戦っていた。特に中津隊の活躍が目立った。残念な事に新奇隊の活躍はつまびらかではない。竹田の報国隊は百六十名が最後まで戦った。此の戦いには両軍とも多くの死傷者をだした。田原坂以降部分的に西郷軍が勝利を挙げたのはこの豊後、日向路の戦いのみであった。

明治十年八月十六日、西郷は戦局利有らずとして可愛岳東麓俵野（現延岡市俵野）にて全軍に解散命令を布告した。解散令により傷病兵を先に西郷軍諸隊の大部分が降伏した。残る私学党主体に百有余名が鹿児島島の城山に戻るよう占拠中の官軍に攻撃をしかけた。中津隊の増田末太郎も隊員を降伏させ西郷と共に行動を共にした。後、彼

は囚われの身となり斬首される。野村忍介も西郷に追従するが、途中で降伏勧告され捕らわれた。懲役十年の刑を受けるが恩赦により四年で出獄する。

大西郷死す 明治十年九月二十四日岩崎谷

八月十六日解散令の布告の後、延岡から霧島方面を経て九月初旬鹿児島城山に到着した西郷軍は、周囲を囲む官軍と対峙。西郷隆盛は九月二十四日の官軍総攻撃により岩崎谷にて自刃する。享年五十一。

漢詩「城山」

孤軍奮闘破圍還 一百里程墨壁間

我劍既折我馬斃 秋風埋骨故鄉山

西郷軍に従った佐伯藩士（新奇隊）のうち十一名が戦死し、官軍に投降した者が七名であった。解散後に帰郷したものの二十二名、後に帰郷者よりこの墓地に常夜灯一対が寄贈され菩提を弔う。

我が家の畑周辺では艦砲射撃の砲弾の収集が始まり、家の畑より数発の弾丸が掘り出された。これらの砲弾は

兄弟にも分ち、一つは我が家の味噌造りに使うミンチの台を固定するために使われた。父が在世中に当時の佐伯東尋常小学校の出納校長の懇請により寄贈した。砲弾は綺麗に磨き上げられ、永らく校長室に飾られていたという。

## (二) 大水害と学徒動員令

昭和十八年九月十九日～二十日にかけて襲った暴風雨は、雨の多い佐伯地方でもかつてない大風雨となり、総雨量八百九十二ミリを記録し、県南地方を襲った最大の暴風雨となった。この項執筆にあたり佐伯図書館に照会したところ、一つの資料も無く数日後県図書館に問い合わせるの返答が次の通りであった。私たちのその後の学徒動員令に基づく行動の事とも在京の友人数名に聞いたところ、水位が家のどの位であったぐらいの記憶で、その後の生徒達の行動は覚えていない。

この暴風雨の被害は、死者四十八名、行方不明二十一名、全壊家屋二百六棟、床上浸水千五百七十三棟、床下浸水四千九百二十六棟、堤防決壊二カ所であった。

この雨台風は宮崎、大分等日豊本線沿線より鳥取県に

かけて猛威を振るい、全国で死者七百六十八名、行方不明二百六十二名、倒壊流失家屋二万五千八百七十七棟に上った。戦後間もない昭和二十年九月には枕崎台風が、十月には阿久根台風が西日本を襲い多大な被害を被っている。

昭和十八年の暴風雨の事について友人は、「中島町に下宿していたY君は、一階鴨居付近まで水が来て二階に避難した。」「東常盤のK君は昼頃二階に避難していたが、瞬く間に水が来て二階まで浸かった」「軍の引き込み線に大きな材木が掛かり水をせき止めたからだ。」とも言っていた。

我が家は土間に少し水が入った程度だった。海軍防備隊のトラックに積まれた船艇が何艘も常盤橋の下に降ろされ街の方に出て行くのが二階より良く見えた。

東常盤の海軍官舎の住民が、誰に聴いたか大勢裏の海軍の下宿をしている建物に押しかけていた。母親は海軍の兵隊が受けていた配給の米（遠洋航海中食べないで残っていた物）を炊いて昼夜食べさせていた。寝具も二十五人分も有ったので面倒を見てあげた。我が家に下宿していて母親が一役買って結婚させた森一等兵曹の新妻が住まいと共に流され亡くなっている。津志河内の人であっ

た。森一等兵曹は哨戒艇の乗組員で南洋群島方面に出航中であつた。彼は翌十九年に輸送船団護衛中に台湾沖で戦死している。

日豊本線はずたずたになり、一部の復旧にも二週間はかかつていた。

中学三年の秋、同級生八名を第十三期海軍甲種飛行予科練習生に送り出した。その中の一人、元成豊建設社長の横川君の手記を照会しよう。

昭和十八年九月二十六日、佐伯中学校（現佐伯鶴城高等学校）の校庭の朝礼で数人の名前が呼ばれ号令台の前に並ばされた。

「君たち、合格通知が来ている。明日朝佐伯港出發だ。」

この中の一人は私である。通知を家で受け取つた人もいた。台風が二十日ごろ上陸、日豊本線が寸断されている中、私は船で大分まで行き豊肥線經由で鹿児島航空隊に入隊したものだつた。父母の許可も取らずに入隊することになった私は、関門国道の工事をやっている門司の両親の所に挨拶に寄つたが、父はすでに鹿児島にむかつていた。鹿児島駅に二十九日午後五時までに集合するはず

が、遠回りをしたので午後七時頃になった。先についていた父が心配顔で待つていてくれた。その夜は照国神社の傍の大園旅館が私の指定旅館だつた。

九月の終わり頃と思うが、私どもは佐伯市藤原の堤防決壊場所の修復にでかけ、一週間ほどトロッコ押しをした。平年でも暑い頃だが、台風の後には特に暑かつた。

その後、切畑村（現佐伯市弥生）細田の決壊場所の修復に汗を流した。この地までは我が家から一里強、日の丸当水筒を持ち、手拭いを腰に下げ朝六時半に家を出て歩いて通つたものだつた。往復だけでも大変だつた。

この年、学徒勤労動員令が施工され、中学生生徒以上は年間六十日の勤労活動が指示され、工場に或いは農家の応援に働かされていた。

翌十九年八月二十二日勅命により、初等科国民学校児童、青年学校生を除く全学生は一年間学業停止、勤労動員の指令が出て、佐伯中学校五年生と三年生は二班に分かれ、東九州造船佐伯工場で機帆船の工事（燃料節約と磁気機雷の予防、国内輸送、対空監視船として増産中）保土ヶ谷化学工場建設工事に就業する。私どもも四年生は二分の

一が日本セメント佐伯工場（現太平洋セメント海崎工場）、残り二分の一が福岡市の昭和電工。佐伯高等女学校四年生は、久留米市日本ゴム、福岡市昭和鉄工に就業していた。また、津久見工業三年生の一部は三菱造船所長崎で就業、被爆したと言う。

### (三) 友に借りた本と五所明神

大同四年（八〇六）創建、元県社、南海部郡一宮の五所明神の西、標高百十一メートルの臼坪山を背に線路沿いに百戸余りの集落「臼坪」がある。以前は「ウシツボ」「ウツボ」とも呼ばれていた。

昭和十二、三年頃南海部郡内で三十番位に入る大地主が三、四軒あった。他の男衆も日本通運の仲仕、海軍軍需部の雇員、馬車引き、基礎工事・屋根工事も兼ねた左官業などで働き、老人や細君は稲作、蔬菜作りなどの「三ちゃん農業」で裕福に暮らしていた。我が蟹田地区はお宮を挟んだ東側に位置している五十戸程の分村である。

小学校六年の頃、其の集落のT君が「策さん、おまえは本が好きようだ。盆踊りの本を貸そう、学校が終わったら家に来い」と言った。彼とは四月十五日、十七日、五所

明神様の大祭の御供の杖踊りの仲間、毎年一月前より臼坪の資産家の坪（庭）で稽古しあう仲だった。彼の父は左官業で、近郷に響いた名うての盆踊りの音頭取りであった。

私はどんな本かなと心弾ませながら終業のベルが鳴ると同時に彼の家に急いで言った。彼が持つて来て来たのは変体仮名で書かれた謡曲の本のような護摩が振つてある盆踊りの音頭本だった。

堅田郷で有名な「修験者の娘お為と医者の子半蔵の悲恋、鉄砲心中を題材にした長い盆踊りの口説き（お為半蔵長音頭）」なら、姉や父の従兄弟などに聞きながら読めば面白く勉強になる。「こんな本なんかわかりやせん」と心で思いながら、その場で返すのも悪く、一週間ほど持つていて返した。

いまなら金を払つても買いたい本である。平成十年の同窓会で帰郷、彼に会い「あの本は」と問うと。「家を改築した際捨てたという。只でやったののう」と答えた。惜しい事をしたと今も思っている。

五所明神は佐伯町や南海部郡九十九浦や山村一帯の氏神様、「初代毛利の殿様」が神殿、境内等整備し初穂料な

ど奉納。塩屋村の村人も一層信仰するようになった。その信仰が海岸部を始め藩全体に拡がっていった。

三年前同窓の会で帰郷した際、本殿、摂社などが修理され能楽堂付近に新しく社務所が設けられていた。

大きく変わり綺麗に成っていた。裏にあつたお地藏様も摂社脇にお祭りされていた。県指定天然記念物の「なぎ」の木も残っている。

子供の頃、杉の大木が空を睥睨へいげいしていた五所明神。台風後の杉の葉拾い、秋にはどんぐりを拾い小さな椎の実を食べ、春には竹鉄砲の弾に榎木の実を取った。一帯が杉や照葉樹林に覆われた広い境内、なつかしいお宮だ。

此の改装が元藩主毛利財団を始め、名市長と言われた出納菊次郎先生のご子息一さん、加藤公正氏、津井浦・大入島、米水津の集落、個人個人からの賛助金によるものとなり感激を新たにしました。

昭和二十五年頃、台風でご神木が斃れ、加藤製材加藤、佐伯木工渡辺両社長が入札で購入した。山番頭が暇を見て年輪を数えて話すには、「千八百年近くまで数えたが、洞うとで判らない。二千年は優に越えている。」と語っていた。

私の住んでいる牛久付近に大杉神社がある。四国の金

比羅山と同様、民間信仰の海の神様である。

戦前は関東沿岸及び各河川流域、千島、樺太まで分霊が祭られていた。悪霊を払い生計の漁が盛んであるようにと祈念し、海人や地域の人々に尊崇されていた。

わが五所明神様も、神武東征以前より、海人達の悪霊退散、家族安栄、部落民総和の為祭られて来たのではなからうか。

この随想「ふるさと」は、茨城県牛久市に住む史談会会員、加藤策二氏の冊子より三回にわたり連載しました。佐伯の昔の様子、人々の生活の一端が伺われたのではと思っています。ご愛読ありがとうございます。